
魔獣物語

ひよく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔獣物語

【Nコード】

N2033Z

【作者名】

ひよく

【あらすじ】

濃い瘴気に長期間さらされた事で、脳が変化してしまった生物の事を「魔獣」と呼んでいます。

また、魔獣化してしまった人間の事を「魔人」と呼んでいます。魔獣と戦う戦士と魔術師のコンビのお話です。

「みんなの . j p p」 「novelist . j p p」 「小説&まんが投稿屋」等のサイトと重複投稿となっています。

登場人物紹介

カナ

ヤンチャ？な性格の女戦士。幼い頃から剣技はピカイチ。

おとなしくしてれば美女だろうに、そうしている事は、まずない。

第1章の時点で二十歳。

ダン・キャストスペイ

カナの相棒役の魔術師。冷静沈着な性格が仇となり、奔放なカナに振り回される。

「賢者」と呼ばれる事を嫌い、魔術師とは思えない戦士風の格好をしている。

カナと同じ年。

序章 1

空が赤く燃えていた。

妙に美しく、神秘的な光景である。

しかし、それは夕焼けではない。朝焼けでもない。今の時刻は深夜なのだから。

村を焼く炎が、空を赤く照らしているのである。

この場にいるのは、女子供と年寄りばかり。着の身着のまま、村から逃げ出してきた。

村の男達、つまり彼女らの夫や父や息子は、妻や子や年老いた親を村から脱出させるため、武器を取り、突如、村に襲い掛かった醜悪な敵と戦っている。

突然の襲撃ではあったが、それでも男達が負けるとは、彼女らは考えていなかった。

村の男達は、長年の自治の間、ずっとこの村を自警してきた。武器の扱いにも、戦闘にも、慣れていて。しかも、彼らを率いる2人の男は、このような小さな村に埋もれているのが不思議なくらい、有能な人物だった。

同じ人間では右に出る者はいないと囁かれる最強の戦士。そして、
‘パスツレラの大賢者’と呼ばれる魔術師。

どの国の騎士団長でも、どの国の宰相でも、勤められる男達である。

伝説にさえなっているこの2人の名を知らぬ者は珍しいが、この2人がこの村で暮らしている事を知る者は、村の外にはほとんどいない。

この2人の力によって、村は幾度もの危機を乗り越えてきた。この2人の男の敗北など、想像する事さえ出来なかった。

しかし、それは先刻までの話である。

女子供と年寄り達は、小高い丘の上から、赤い空を、焼け落ちる村を、絶望の思いで見つめていた。

序章 2

呆然と立ち尽くす戦う術を持たない者達の中に、厳しくも強い意志を込めた瞳で、自分達が逃げ出してきた村を見つめる少女と少年がいた。

この2人は他の者達とは違い、戦う力を持っている。

少女の父は、戦士。少年の父は、魔術師。共に村の男達を率いて、今まさに戦っている。

少女は、父に剣技を習っている。少年は、父に魔術を習っている。既に並みの戦士や並みの魔術師を、とうに上回る実力の持ち主である。他の村の男達より、ずっと戦力になるはずだ。

それでも2人の父は、少女と少年に他の女子供と一緒に避難するよう命じ、2人が戦闘の場に残る事を、頑として許さなかった。

2人の父は、娘と息子の身の安全を最優先したかった。そして、それは常識的に考えて、許される行為に思われた。何故なら、少女と少年は、まだ十にも満たない幼い子供だったのだから。

その少女と少年の手を、1人の女性がきつく握り締めていた。

戦士の妻タミナである。

女性にしては心身ともに逞しく、なかなか豪胆な女性ではあるが、それでも、彼女は「戦う術を持たない者」の1人であった。しかし、彼女は皆の避難を誘導するという役割を担い、か弱き者達をここまで連れてきた。

彼女の右手は娘の手を、左手は夫の親友の息子の手を握り締めている。

右を見下ろすと、同じ年頃の子供の中でも小柄な部類に入る娘が、黙って村の方角を見つめていた。

(この子の髪、本当にあの人に似ているわ。)

非常時というのに、ふとそんな事を考えた。

娘のカナは、緩くウェーブのかかった赤髪をしている。その鮮やかな赤色は、どう見ても父親譲りだ。夫は短く刈っているが、娘は一応、女の子なので、肩より少し下くらいの長さに伸ばしてある。女の子らしいところの少ない娘なので、髪くらい伸ばさないと、男の子にしか見えないのだ。着ている服も男の子用の物である。

女の子用の可愛らしい服は、遊ぶのに邪魔になるからと、なかなか着ようとしらない。この子の遊びは、お人形遊びや御飯事ではないからだ。

カナの背には、小さな体に似合わぬ大剣が背負われている。

それは玩具ではなく、ましてや飾りでもない。夫が今よりもっと若かった頃に、愛用していた品だ。無銘だが、数々の戦を潜り抜けてきた名刀である。カナは、それを自在に使いこなせる事を、タミナは知っていた。

タミナは次に、左を見下ろした。黒髪の少年が、娘と同じ方角を見つめている。

この黒髪の少年ダンは、娘と同じ年。体の大きさもちょうど同じくらいで、実はカナの着ている服のほとんどは、ダンのためにタミナが縫った物である。だが、もう少し成長すれば、ダンの方が背も高くなるだろうし、体も逞しくなるだろう。

ダンの目は、カナとよく似ている。深緑の瞳に、子供のくせに切れ長な目つき。血は繋がっていないのに、まるできょうだいのように見えて、タミナは、なんだかこの少年まで我が子であるかのよう に思っ て接してきた。実際、生まれると同時に母を失ったダンの母親代わりをずっと務めてきた。

だから、タミナは知っている。ダンの力を。カナと違って、武器は

何一つ持っていないが、彼にとって、剣は大した意味を持たない。

2人が今、何を思っているのか、タミナにはよくわかる。だが、それを許す気にはなれない。

2人の力を知っていても、母として、許す事ができないのだ。

タミナの握っていた手を、カナが外そうとした。

「いけません。」

タミナはカナの手を更にきつく握り直し、厳しい表情で言った。

「あなたはここにいろ。ダンもよ。お願いだから言う事を聞いて。」

だが、カナは反抗的な、それでいて甘えるような瞳で母を見つめると、強引にその手を振りほどいた。

「カナ！」

続いてダンも、カナを追うように、タミナの手を振りほどく。

「駄目よ！カナ！ダン！」

2人は、今しがた逃げ出してきたばかりの村に向かって、駆け出しました。

しかし、2人はほんの十数メートル走ったところで、立ち止まってしまった。

自分の必死の呼びかけが通じたのか？

一瞬、そう思ったタミナだが、すぐにそれは間違いである事に気が付いた。

不気味な男が1人、木々の間から、ぬっと現れたのだ。

序章 3

男の服はズタズタで、幾つかの小さな布切れが、かろうじて体に纏わりついているのみ。虚ろな目は焦点を結んでおらず、半開きの口からは涎がこぼれていた。

まともな人間ではない。

誰が見てもそれがわかるほど、男は全身から異様な雰囲気醸し出していた。

慌てふためいた村人達は、逃げ場を求めて右往左往するが、背後は切り立った崖である。逃げられるとすれば、先程、通ってきた村に続く道だけなのだが、それはこの不気味な男の背後にある。

「何なの、この男!？」

思わず叫んだタミナの言葉に答えたのは、ダンだった。

否、タミナに答えたというより、カナに話しかけたと言った方が正しい。

「魔人だ、カナ。気を付ける。」

落ち着いた声である。この場にいる人間の誰よりも、彼は落ち着いていた。

魔術師は常に冷静であれという父の教えが、彼の子供らしくない冷静沈着な性格を作り上げていた。

どうやら、父達に加勢に行くには、まずこの男を倒さねばならないようだ。

ダンは集中し、魔法力を高めた。

「魔人！？魔人って、なんだ！？」

ダンほど冷静ではないカナは、動揺した声でダンに訊きかえした。それでも抜剣し、素早く身構えるあたりは、さすがである。

「魔獣化した人間の事だ。人間だって、魔獣化する事はあるんだ。ごく稀にな！」

ダンは空気の流れを掴み、それをコントロールするように魔法力をこめた。

すると、風は刃となって、魔人に襲い掛かった。鎌鼬の魔法である。

ダンの作り出した鎌鼬は、魔人の皮膚に無数の裂傷を与えた。だが、大したダメージではない。魔人の全身からは血が滴り、一見すると派手に見えるが、ひとつひとつの傷は浅い。

魔人がその攻撃に一言の声も漏らさなかったのは、魔獣化によって恐怖を感じる神経が麻痺していたせいなのだが、そうでなかったとしても、悲鳴は起こらなかったかもしれない。

しかし、次の瞬間、カナが大地を蹴って、魔人に飛び掛かった。

序章 4

魔術師が敵を攪乱して、戦士が仕留める。または、戦士の攻撃を魔術師が補佐する。

戦士と魔術師が共に戦う際の基本戦術である。戦闘に長けた魔術師ほど、自らの攻撃魔法で敵を仕留めるより、戦士のサポート役に徹しようとする。

相手が強敵であればあるほど、この戦法は有効であり、戦士にとっても魔術師にとっても、より安全なのだ。

カナは、ダンの魔法攻撃による魔人へのダメージの大小は、はなから気にしていなかった。ただ、自分が攻撃するための隙が出来さえすれば良いのだ。

カナは、父に習った基本の構えから、攻撃に移った。

自分より大きな敵に出会った時は、重心を低くし、中段に構えた剣をやや斜め後ろに引いて、飛び上がりやすい体勢をとれと。

その教えを忠実に守り、そして、飛び掛かった。

大きく跳躍し、魔人の左の首筋を狙って、剣を振り下ろす。

しかし、誤算だったのは、ダンの鎌鼬では、魔人に隙を作ることさえ出来ていなかったという点だ。

魔人はカナの攻撃に慌てる事もなく、カナが剣を振り下ろすよりも先に、左腕でカナの小さな体を薙ぎ払った。

カナは、凄まじい勢いで吹っ飛ばされた。

序章 5

「カナああー！」

タミナが、悲痛な声で我が子の名を叫んだ。

だが、ダンには動じなかった。

カナは咄嗟に体をひねり、魔人の攻撃を背負っていた鉄製の鞘で受け止めていた。地面に叩き付けられる時に受け身をとったのも、確認できた。

大した怪我はしていないはずである。

吹っ飛ばされたカナにさらに攻撃をしかけようとする魔人に向かって、ダンは次の魔法を繰り出した。

強烈な光をフラッシュのようにたいて、目くらましをかけたのである。

「ぬお！」

「きゃあー！」

魔人だけではなく、その場にいた村人達まで目がくらんでしまった。突然、視界を奪われた村人達は、パニックに陥っているが、この際、それは二の次である。

ダンは当然、その瞬間だけは目を閉じて自分の目を保護していたし、カナが顔を伏せているのも確認していたから、カナの目も無事なはずだ。

目くらましの魔法は、鎌鼬の魔法に比べて、ずっと初歩的で簡単な魔法なのだが、こちらの方が魔人には効果があったようである。

『高等魔法を無闇に使つより、簡単な魔法を自在に使いこなす方が、はるかに有効』

ダンが父の教えを初めて実戦で実感していた。

「グオオオー！」

魔人が目を押さえて仰け反った。

その最大の好機に、カナは魔人の右腕を肩から切り落とした。

目くらましの効果が解け、視力の回復した村人達が最初に目にした光景は、片腕を失くし、ほとばしる鮮血を押さえてうめく魔人の姿であった。

序章 6

村人達は、喚声をあげた。

しかし、ダンは驚き、叱責の声をとばした。

「何やってるんだ、カナ！」

「ごめん…。」

カナは肩で息をしながら、小さな声で答えた。

魔人は、腕を切断されたくらいで死にはしない。今のタイミングなら、首を刎ねる事も心臓を刺し貫く事もできたはずだ。しかし、何故かカナはそうしなかった。

（何やってるんだ、カナ。）

ダンは心の中でもう一度、先程と同じ台詞を繰り返した。

一刻も早くこの魔人を倒し、父達に加勢に行かなければならないのに。

だが、今は口論している場合ではない。

片腕を斬り落とされた怒りからか、魔人はカナに激しい攻撃を仕掛けてきた。残された左腕を振り回し、カナを追い詰める。

身の軽いカナは、その攻撃をすべて躲していたが、魔人の攻撃は一撃一撃が重い。カナに躲された魔人の拳がぶち当たった大岩は、いとも簡単に碎け散った。

まともに食らえば、一発で致命傷である。

最初にカナを吹っ飛ばした魔人の攻撃は、うまい具合に鞘で受け

止めたが、実はその時のカナのダメージも、ダンが当初、考えていたより深刻だった。

肋骨に連結している肋軟骨が損傷していたのである。

序章 7

魔人が拳をハンマーのように振り上げ、カナに向かって振り下ろす。

カナはそれを後ろに飛び退いて避ける。

カナと魔人との距離が少し開いたその瞬間に、「パン」という乾いた爆発音が響いた。ダンが魔人の眼前に水素を集結させ、爆発させたのだ。

小さな爆発だったが、魔人は驚いて後退する。

その隙に、ダンはカナに駆け寄り、回復魔法をかけた。

カナの動きを見ているうちに、ようやくカナの負傷に気が付いたのである。

「回復が必要な時は、早めに言え。」

そう言っつて、ダンはまた後ろに下がった。戦士のような素早い身のこなしが出来ない魔術師は、敵に近付き過ぎると危険なのだ。

カナは黙って頷いたが、その顔は蒼ざめていた。

(さつき魔人を仕留めそこなったのは、怪我の影響だろう。)
ダンはそう考えた。

実際に、回復魔法を受けると、防戦一方だったカナは攻撃に転じた。

「えええい！」

幼い声で気合を入れ、鋭い突きを繰り出した。それが躲されても、すぐに横薙ぎの攻撃に転じ、魔人の喉を浅く切り裂く。

あと一步のところまで頸動脈には届かなかったが、なかなかの攻撃

である。

続けて、カナは左膝を落とした態勢から、魔人の正面を左から右に向かつて、斬り上げた。これは魔人の右脇腹から左胸にかけて、決して浅くはない傷を作った。

しかし、やはり惜しいところで致命傷には至らなかった。

ダンは、魔法を繰り出すタイミングを計りながら、カナの戦いを見ていた。

（何故、攻めあぐねている？）

ダンは違和感を持っていた。

今の2回の攻撃は、どちらも致命傷になっていておかしくない気がするのだ。

魔人も、見かけよりは素早い動きがとれるようだから、躲されるのも無理のない事なのだが、素早さだけで言えば、カナは自身の父にすら、引けを取らない。怪我も今さっき癒したのだから、体も万全のはずだ。

（魔法の援護を待っているのか？）

そう思い、ダンはさらに神経を集中させた。

序章 8

カナの袈裟斬りの斬撃を躲し、魔人が僅かによるめいた瞬間、魔人の足元が弾けた。

ダンは一程、魔人の眼前に放った爆発の魔法を、今度は魔人の足元に使ったのである。

魔人は堪らず、仰向けにひっくり返った。

絶好のチャンスである。

カナは魔人の首筋めがけて、剣を突き刺した。

ところが、驚くべき事に、カナはそれでも魔人を仕留められなかった。

剣は魔人の首筋の横に地面に突き刺さっていた。

「カナ、お前……」

ダンは信じられない気持ちで、その光景を見つめていた。

「ダン……」

ダンのほうに振り返ったカナの顔は、今にも泣き出しそうだった。

ダンは、ようやくわかった。何故、カナが魔人を斬れないのか。

カナは魔人に馬乗りの体勢になっていた。魔人は左腕を伸ばし、カナの頭を片手で鷲掴みにした。

地面に剣が突き刺さったままになっていたので、逃げるのが遅れた……というわけではなく、カナはもう半分泣きべそをかいていて、逃げるどころではなかったのである。

魔人は上半身だけ起こした体勢で、まるで手毬でも放るかのよう

に、カナの体を、ダンの後ろにあった大木の太い幹に向かって投げつけた。

ドオンという轟音が響き、大木が揺れ、叩き付けられたカナは、そのまま木の根元に倒れ伏した。

序章 9

「カナああー!!」

最初にカナが魔人の攻撃を受けた時と同じように、タミナが悲痛な叫び声をあげた。

だが、今度はタミナばかりではなく、ダンも同じようにカナの名を叫んでいた。

カナは悲鳴をあげなかった。

即死したかもしれない。

最悪の可能性を頭から振り払うように、ダンがカナに駆け寄り、その体を抱き起した。

タミナも、カナのもとへ駆け寄ろうとする。

それをダンが大声で制した。

「来るな！大丈夫！生きてるから！」

そう叫んだダンだが、実際には、まだカナの生死は確認していない。タミナに出て来られては困るから、咄嗟にそう叫んだだけである。

タミナを安心させるために。

それ以上に、自分がそう信じたかったから。

ダンに怒鳴られ、タミナは硬直したように、その場に留まった。

「生きている」と言われて多少は安堵したものの、とてもではないが、無事には見えない。

だが、ダンの言葉には逆らえない迫力があつた。

魔人は立ち上がろうとしたが、よろめいて、また尻餅をついた。

右腕は切り落とされ、それ以外にも大小いくつもの傷を負っているのだ。あまりの出血量に、さすがの魔人の体もついていけなくなっているのである。

ダンは祈るような気持ちで、カナの首筋に指をあてた。

(生きてる！)

弱々しいが、確かに脈がダンの指にふれた。

生きてさえいれば、回復魔法が使える。ダンが最も得意とする魔法は、回復魔法なのである。

ダンはある程度の魔力を回復の力に変えて、カナの体に注ぎ込んだ。

破裂した内臓を修復し、砕けた骨は大きな箇所だけ繋ぎ合わせた。

これで、命は取り留めるだろう。

だが、これが限界である。完全回復は到底、不可能だった。カナは戦線離脱するより他にない。意識すら戻っていないのだから。

しかし、それはむしろ好都合とダンは考えた。

カナに魔人は斬れない。

それがわかったからである。

よく考えれば、それは当然の事と言える。それに気付かなかった自分の迂闊さに、ダンは呆れた。

序章 10

魔人とは、魔獣化した人間の事である。

生物は、特殊な瘴気に長期間さらされると、脳が変化してしまう事がある。

そうなってしまった生物を魔獣と呼ぶ。

魔獣化した生物は、もともとの性質に関わらず、激しい凶暴性を帯び、強い破壊衝動にかられて暴れまくる。また、通常の何倍もの力が出せる。それは、普段は脳がリミットをかけて出せないようにしている力…所謂‘火事場のくそ力’が無尽蔵に出せるようになるためらしい。

そして、一度、魔獣化した生物は、決して元に戻る事は出来ない。

この日、村は魔獣の大群に襲われたのである。

村で飼われていた家畜や犬猫などの小動物、果てには小さな虫に至るまでが、突如として魔獣化したのだ。しかも、村の裏手にある森の生物達も、魔獣化して襲ってきた。その中には熊や狼などの猛獣も多数含まれていた。

村の裏手の森は、もともと瘴気の濃い場所があり、たまに魔獣が発生する事もあったが、村までやって来た事は一度もなかった。

森に魔獣が発生すると、森で猟をする狩人達にとつては死活問題となるため、その度にカナやダンの父が退治に出掛けた。そして、次第にそれにカナとダンも同行するようになった。最近では、カナとダンの2人だけで退治してくるようになり、父達に言われる事も多くなっていた。

2人はお使い感覚で魔獣退治をしていたのである。

だから、カナもダンも実戦経験がないわけではない。

だが、魔人を、人間を相手にした事はなかった。

どんな生き物でも魔獣化する可能性はあるが、人間の魔獣化は珍しい。が、ないわけではない。

この魔人も、もとは普通の人間としての暮らしがあつたはずである。もとは優しい性格だったかもしれない。家族もいるかもしれない。

一度、魔人になってしまった以上、もう元に戻る事は出来ない。そして、

今のこの状況では、殺らなければ殺られる。

ならば、殺るしかない、ダンなら割り切れるのだが、カナはそうはいかなかった。斬ろうと思つても、あと一歩のところ、剣は魔人の急所を外してしまった。

しかし、この場合、カナのほうが正常な反応と言える。

カナは破天荒な少女ではあるが、ちよつとヤンチャなだけで、本質的には普通の子供なのだ。

割り切れてしまうダンのほうが、異常なのである。

序章 11

ダンを抱えていたカナの体を地面に横たえ、カナを庇うように魔人の前に立ちはだかった。

自分ひとりでもやるしかない。

だが、ダンも先程の回復魔法で、魔法力の大部分を消費してしまった。余力はほとんど残っていない。

しかし、魔人も既に相当、消耗している。勝機はあるはずだ。

よるめきながら立ち上がった魔人は、ふらついた足取りで、一歩、また一歩と近づいてくる。

一撃で仕留めなければならぬ。

ダンには、カナのような戦士としての動きはとれないからだ。相手の攻撃を躲す事など出来ないのだ。接近戦に持ち込まれれば、魔術師は一巻の終わりである。

やるなら、魔人との距離が開いている今しかない。

ダンは、自分が使える最大級の攻撃魔法の準備をしていた。

実践では使った事のない魔法だが、今は敵に隙を作る事だけを目的とした小手先の魔法では、どうにもならない。

魔法とはイメージーションである。思い描いたイメージに、魔法力を付加させる事で、それは現実のものとなる。イメージが鮮明であればあるほど、魔法は強く発動される。

『燃え盛る炎。全身を焼き尽くす激しい業火。』

ダンは‘炎’を強くイメージし、残された魔法力を振り絞って、それを一点に集中させた。

「これで終わりだ！」

ダンは集中させた魔法力を、魔人に向けて一気に解放した。

魔人はそれを避けようとすら、しなかった。

ゴオオ、という爆音とともに火柱があがり、一瞬にして魔人の体は炎に包まれた。

魔法は成功したのである。

序章 12

(やったか!?)

しかし、魔人は炎に包まれながらも、そのまま歩みを止めずに近づいてきた。

魔法そのものは成功したものの、魔人の強大な生命力は、その魔法の炎に打ち勝ったのである。

魔法の炎は、白煙となって消えてしまった。ダンの精神力がそれ以上、続かなかつたのだ。

白煙を纏いながらダンの目前まで迫ってきた魔人は、左腕を振り上げ、それをダンに向かって振り下ろそうとした。

(駄目だ...)

自分には躲しきれない。

仮にこの一撃を躲せたとしても、あの火炎魔法が通用しなかった以上、もうどうする事も出来ない。あれ以上の威力を持つ魔法を作り出せる力は、もう残っていないのだ。

ダンは、死を覚悟して目を閉じた。

次の瞬間、ダンの体に強い衝撃が走った。

(痛みを感じる前に死ねると思ったのに、意外と痛いじゃないか。)
そんな事を思いながら、ダンは魔人の斜め後方に吹っ飛ばされた。

序章 13

だが、ダンには死んでいなかった。
ほんの一瞬、ほんの数秒間、気を失っていただけである。

次にダンが目にしたのは、魔人の背中から突き出た1本の剣であった。

魔人がゆっくりと、前のめりに倒れていく。

そうして、魔人が地面に倒れ伏すと、魔人の陰に隠れて見えなかった1人の小さな少女の姿が、ダンの目に映った。

カナである。

意識を取り戻したカナは、ダンが火炎魔法を発動させるのを見た。それはダンにとって、最後の切り札とも言える魔法である。

しかし、魔人はそれでも倒れなかった。

ダンに死の影が迫っている。

そう感じたカナは、駆け出していた。

地面に刺さったままになっていた自分の剣を取り戻し、魔人の攻撃から逃げようとしてもしないダンを蹴り飛ばして助け、魔人の腹に剣を突き立てた。

今度は迷わなかった。

目一杯の力で魔人の腹部に突き立てられた剣は、魔人の体を貫通していた。

時が止まったように、誰一人動こうとしなかった。

倒れた魔人の体が、ビクビクと痙攣するのみである。

序章 14

「助かった…。」

村人の1人が、ぽつりと呟く声が響いた。すると、張りつめていた場の空気がフツと緩み、カナは力尽きたように倒れ込んだ。

「カナ！」

タミナが、カナに駆け寄った。

カナを抱き上げ、膝に乗せる。

母親の膝の上に乗せられたカナは、先程まで魔人と死闘を繰り広げていた戦士とは思えない、実年齢以上の幼い表情を見せ、母親の胸に顔をうずめた。

他の人間から一呼吸遅れて、ダンも緊張の糸を解そうとした。

が、その時、ダンは気付いた。

魔人が、完全に死んではない事を。

そして、魔人の中に、凄まじいレベルの魔法力が高められている事を。

普通の人間が魔人になったからと言って、魔法が使えるようになつたりはしない。

この魔人は、もともと魔術師だったのだ。

魔獣化して理性を失い、魔法の使い方も忘れていた魔人が、死を目前にして、それを思い出したのである。

突如、空に積乱雲が現れた。

雷撃による攻撃魔法。超高等魔法である。

攻撃対象は、魔人の前方にいるすべての人間。カナ、タミナ、そして、それ以外の村人全員。

魔人のやや後方にいたダンだけは、攻撃対象から外されている。

そして、魔法は発動された。

と同時に、魔人は力尽きて息絶えたが、一度、発動された魔法は、術者が死んでも効力を持つ。

もはや、魔法は止められない。

これを防ぐには、攻撃対象に魔法が到達するよりも先に、他の魔法を無力化する対抗魔法をかけるより他にない。

序章 15

ダンは、すぐに決断した。

その僅かな瞬間で、時間にしてほんの1秒あるかないかの間で、実に冷静に、そして冷酷に決断した。

自分の残された魔法力で、その場にいる全員に対抗魔法をかける事は出来ない。かけたとしても、魔法は発動せず、ダン以外の全員が死亡する。

だが、その中のただ1人だけを選び、その1人にだけ絞って対抗魔法をかければ、その者だけは助かる可能性がある。

ダンは迷う事なく、1人の少女を選択した。

そして、その少女にだけ向けて、対抗魔法を放った。

それは、その少女以外のすべての村人、少女の母を含めたすべての人間を見捨てる事を意味していた。

ダンの対抗魔法は、間に合った。

しかし、そこに広がっていたのは、あまりにも凄惨な光景であった。

第1章1

あれから10年の月日が流れた。

パスツレラ大陸の最南端に位置するレプトスピラ王国。

その城下町。‘麦酒の宿’という看板を掲げた宿屋は、今日も多くの宿泊客で賑わっていた。

レプトスピラ王国は、農業大国である。気候は温暖で天災も少ない。肥沃な大地と豊かな海がもたらす恵みが、この国を支えている。ほとんどすべての食料品が自給率100%を超え、自国民を養つて、尚、余りある食糧を他国に輸出している。特にパスツレラ大陸全土で消費されている小麦・とうもろこしの、実に90%はレプトスピラ産である。

レプトスピラ王国は、決して武力の強い国ではない。しかし、食糧を大量輸出し、各国の命綱とも言つべき‘食’を握る事で、軍隊の力なしに他国に有無を言わさぬ権力を手にしている。

‘麦酒の宿’は、1階が酒場、2階が宿屋になっており、宿泊客のほとんどは、1階の酒場で夕食代わりに一杯やってから、部屋で休む。

この宿の麦酒は、レプトスピラ独自の醸造法で作られた特産品で、これを目当てに来る客も多い。

ある1組の男女がこの宿を選んだのも、それが理由だった。男はどこでも良かったのだが、女がここにすると言ったのだ。女の方も、取り立てて麦酒が好きなのではないが、‘特産品’という言葉に弱いのである。

「はいよ、いらっしやい！」

その男女が入口を開けると、恰幅の良い女将の威勢の良い声が響いた。

男女のうち、女の方は緩いウエーブのかかった赤髪を腰まで伸ばしていた。腰に大剣を帯びている事から、戦士である事が伺える。しかし、防具は軽そうな胸当てのみで、二の腕や太腿は露出している。防御力よりも、身軽さを優先させた装備だ。

少々、生意気そうだが、なかなか美しい顔立ちをしており、ドレスでも着せておしとやかに座らせておけば、かなりの美女であろう。しかし、残念な事に、この女はドレスなど着た事はなく、おしとやかに座っている事もない。

男も、戦士風の出で立ちだった。女の持っている大剣よりも、やや小ぶりの剣を腰に帯び、黄土色の板金の鎧を身に着けている。鎧の上からなのではつきりとはわからないが、戦士にしては、やや細身のような。引き締まってはいるが、それほど太くはない手足が、鎧から伸びている。

目にかかるかかからないか程度の長さの黒髪は、少し周りの目をひいた。パスツレラ大陸では、黒髪の間人は珍しいからである。

女も男も、深緑の瞳に切れ長な目つきをしていた。パーツとして見れば、それはよく似ているのだが、不思議な事に、女の場合、それは生意気そうな印象を周囲に与え、男の場合、それは大人びた印象として周囲に伝わっていた。

第1章2

「部屋は、まだ空いてるか？」

カウンターの席に座りながら、男が女将に尋ねた。

「ああ、まだ空いてるよ。」

女将が答えると、今度は男の隣に座った女が、口を開いた。

「それじゃ、1部屋頼む。」

すると、女将は厭らしそうな目つきで囁いた。

「あれ、1部屋でいいのかい？」

この2人は夫婦ではない。それは一目でわかる。

パスツレラ大陸の住人には、結婚すると左手の甲に小さなタトゥーを入れる習慣があるのだ。夫婦で揃いの模様を入れるのである。

ちなみに、離婚するとその上から×印のタトゥーを入れ、再婚すると、もう1つ別に新しくタトゥーを入れる。死別して再婚した場合は、×印をせずに、新しいタトゥーを入れる。

つまり、未婚・既婚・再婚は、すぐにわかるのだ。

2人の左手には何の印も入っていない。つまり、この2人は独身である。

独身の若い男女が、1つの部屋で休もうと言うのだから、厭らしい想像をするなという方が難しい。

しかし、2人の関係は女将の想像したようなものではない。

男が溜息をつきながら、答えた。

「1部屋で構わん。きょうだいだからな。」

「なんだ、妹さんだったのかい。言われてみれば、目元が似てるねえ。」

ちよっと残念そうに女将が言うと、今度は機嫌を損ねたように女

が言った。

「姉と弟だ。双子の姉弟！」

どこの宿に行っても、その度にこんなやり取りをする破目になるのだ。

第1章3

実際には、この2人は姉弟ではない。

宿代節約のために、宿に泊まる時には1部屋しかとらないのだが、そうすると、必ず男女の仲と間違われる。2人の間に恋愛感情はなく、そう思われるのは非常に不本意であるため、そういう場合は、便宜上、きょうだいと名乗るのだ。

幸いな事に、2人の瞳の色と目つきがよく似ているため、きょうだいと言って疑われた例はない。

そこまでは別に良いのだが、‘きょうだい’と言うと、必ず‘兄妹’と思われるのだ。女はそれが、面白くないのである。

実際、2人は同い年の上に、誕生日まで一緒なので、年上も年下もないのだが、女は昼前に生まれ、男は昼過ぎに生まれたらしいので、ほんのちよつとであるが、自分の方が年上だと、女は思っている。

機嫌を損ねた女に代わって、男が注文を続けた。

「食事を2人前。1人前は軽めで、もう1人前は大盛り。それと麦酒のジョッキとオレンジジュース。」

注文を受けた女将は、調理場にそれを伝えると、別の客に呼ばれて、2人のそばを離れた。

「この程度の事で、いちいちむくれるな、カナ。そういう態度が子供っぽく見られるんだ。」

黒髪の男は、赤髪の女に向かって、溜息交じりに呟いた。

「ちがう！お前の背が妙に伸びたから、そう思われるんだ！昔は同じくらいだったのに……。」

カナは剥きになって、言い返す。

ダンは呆れて、また溜息をついた。

ダンは、特に背が高いほうではない。だが、カナよりはずっと高い。性差があるのだから、それは当然だろう。

ダンのほうが年上に見られる理由は、勿論、背丈の問題ではない。

女将が、飲み物を持ってきた。

カナの前にオレンジジュースを、ダンの前に麦酒を置く。

さらに不機嫌になるカナを横目で見ながら、ダンはそっと2人の飲み物を取り換えた。

ダンは、アルコールを全く受け付けない体質なのである。

もしかすると、料理も置き間違えられるかもしれない。大盛りはカナの分なのだ。

カナは一気に麦酒を飲み干すと、すぐにおかわりを頼んだ。

「空腹時に一気に飲むな。体に悪い。」

「ふん、お前と一緒にするな。麦酒程度なら、水と一緒にだ。」

カナはダンとは反対に、酒には強い。いつもなら、麦酒よりもっと強い酒を好んで飲むのだ。

しかし、酔った時の酒癖は悪いので、出来るなら程々にしてもらいたい。

第1章 4

カナとダンが故郷を失って10年。

2人は、パスツレラ大陸全土を旅してまわっていた。

10年前のあの日、魔人が放った最後の魔法で、カナは母を失った。その場にいたそれ以外の村人達も、一瞬にして死体と化した。

ダンと、ダンの対抗魔法により、魔人の魔法が無効化されたカナだけが助かった。

その後、あまりのショックに失神してしまったカナを残し、ダンは1人で村に戻ってみた。すると、村の男達も皆殺しにされていた。その中には、カナの父ザガスの亡骸もあった。

だが、ダンの父カルノンの亡骸は、いくら探しても見つからなかった。おそらくは肉片すら残らぬほどバラバラに吹き飛ばされたのだろう。そう結論付けた。残された遺体の損傷は、どれもあまりに酷かったからである。

しかし、ザガスの亡骸には、違和感を抱いた。ザガスは、自らの剣で喉を切り裂いたように見えたからである。自害だったのだろうか？ 一体、何のために？

そもそも、何故、辺境の小さな村が突然、魔獣の大群に襲われたのか？

謎はいくつも残ったが、それらを解くすべはなく、2人は当てのない旅に出た。

誰もいなくなった村に残っていても、仕方がなかったのだ。

第1章 5

パスツレラ大陸には、8つの国がある。レプトスピラ王国、ヘモフィルス共和国、スピロヘータ王国、クロストリジウム帝国、パラミクソ王国、イーコリー民主主義国、ビブリオ帝国、シュードモナス王国。それ以外に、エルフが住むカリシの森。

パスツレラ大陸の外には、いくつかの小さな島が点在しているが、世界にはそれ以外に大陸はない。

新しい大陸を見つけようとして船出した探検家は数知れないが、彼らが帰って来た事はなかった。

世界の最端にある「終末の滝」から地の世界に落下したのだと賢者達は人々に伝えている。

カナとダンの故郷、ラブド村はスピロヘータ王国の北、クロストリジウム帝国の南、この2大国家の国境に位置していた。しかし、ラブド村の事情は少々特殊で、この2つの大国のどちらにも属さず、自治を行っていた。

スピロヘータとクロストリジウムは国境線を巡って、激しい争いを繰り広げており、そのための最前線基地として、両国ともラブド村が欲しかった。

両国が差し向ける兵を、幾度となく返り討ちにしていたのが、カナの父ザガスとダンの父カルノン・キャストスペイである。この2人が村の指導者だった。否、実質的にはカルノン・キャストスペイが指導者だった。

ザガスもカルノンも、共に村人からの信頼は厚かったが、ザガスは「俺は頭が悪いから」と言って、政治的な判断は、すべてカルノンに任せていたからである。

しかし、ラブド村の村人を全滅させたのは、スピロヘータともクロストリジウムとも思えなかった。両国とも、10年経った今も、無人となった村を手に入れられずにいるのだ。

ラブド村へ行った者は、戻って来ないのである。

つまりダンは、ラブド村からの最後の生還者と言える。

第1章6

結局、カナは麦酒では満足できず、ウォッカを飲んでいた。既に何本かの瓶を空にしている。

「ダン。お前、剣の扱い、随分上手くなったよなあ。私が戦っているのを見て、見様見真似で覚えたらけなのに、大抵の魔獣なら、もう相手になあないもんな。」

少々、呂律が怪しい。やっと酔ってきたようだ。

今夜は、暴れ出す前に眠ってくれるだろうか？そう思いながら、ダンは適当に返事をする。

ダンのグラスの中身は、今はマスカットジュースである。果樹園も多い、このレプトスピ王国。新鮮な果実から作られた搾りたてのジュースは、どれもなかなかの物で、ダンは秘かに満足していた。

酒場は、人もまばらになってきた。ほとんどの者が、2階の部屋に引き上げていったのである。

そろそろ自分達も、部屋に引き上げた方が良さそうだ。

ダンがそう思った時、カナの隣に上半身裸の大男が座った。

背丈は、2m近くあるだろうか。縦も大きい、横も立派なもので、筋骨隆々。頭は剃っているのか、それとも禿げているのか、髪は1本もなく、背には大ぶりのバトルアックスを背負っていた。

こっぴつ大男が、いかにも好みそうな武器である。

大男は持ってきた酒瓶を傾けて、カナのグラスになみなみと注いだ。

「コイツは俺の奢りだよ、ねえちゃん。ほれ、そっちのにいちちゃんも。」

ダンにも酒を勧めるが、ダンはそれを丁重に断る。

「生憎、俺は酒が飲めない体質でね。それと、そっちの女にも、それ以上、飲ませないでくれ。あとの面倒は、俺が見なけりやならないんだからな。」

「付き合いの悪い男だなあ。なあ、ねえちゃん？」

そうは言うものの、大男はそれほど気を悪くした様子はない。カナのグラスに自分のグラスを合わせる。

「コイツは、いつもこんなんだぞ。」

カナは、注がれた酒を一気に飲み干し、もつと注げと言うように、男にグラスを突き出した。

「おお、いいねえ、ねえちゃん。なあに心配しなくても、あとの面倒は、俺が見てやるよ。ちやーんと、ベッドまでな。」

そう言つて、大男は厭らしい笑みを浮かべる。けれど、そんな表情が不思議と様になる男だ。下品なのに、不快な印象は与えず、何か好感を抱いてしまう。

第1章7

大男は、またカナのグラスになみなみと酒を注いだ。

「ところでよ。さっきの話、ちょっとばかり聞こえてたんだが、お前ら、魔獣を相手にどうのこうのって、言ってたよな？」

大男が少し真顔になって、問いかける。

「だから何なんだ？」

ダンは、大男を睨みつけながら、そう返した。

カナは、特に聞かれて困る話をしていたわけではないが、盗み聞きされていたのは、気持ちの良いものではない。

「へへへ、そう怖い顔すんなって。お前らもしかして、『退治屋』じゃねえかと思ってよ。」

『退治屋』とは、魔獣退治を専門とする戦士の事だ。

魔獣は、パストレラ大陸全土で、散発的に発生する。そして、それは人間が生活する上で、何かと問題になる。

それを駆除する事を生業とする者達がいるのだ。

『退治屋』と言えば、退治屋だが、それ専門じゃない。報酬次第で、人間相手の戦闘も請け負うからな。」

ダンが答える。

「なんでもいいさ。とりあえず、魔獣は倒せるんだな？」

「魔獣と一口に言っても、いろいろな種類があるだろう。それに弱い魔獣だって、群をなしたら、手強い相手になる。どんな魔獣がどれくらいの数なのかによって、答えは変わってくる。」

「まあ、普通の魔獣だ。」

『普通』とは、何を基準に言っているのかわからない。

それでは答えようがない。

ダンがそう思っていると、カナが口を出した。

「私らに、倒せない魔獣はいないね！」

カナはそう言って、大男の顔面めがけて、拳を繰り出した。そして、それを寸止めしてみせる。酔っているとは思えない、鋭いパンチだ。

大男は、一瞬、驚いた顔をしたが、ニヤリと笑ってカナの肩を叩いた。

「思ったより、やるじゃねえか。これは悪くない話だぜ。いいか、よく聞けよ。」

好奇心旺盛なカナは、酔いも冷め、興味津々と身を乗り出して、大男の話を聞き始めた。

ダンは視線をそらしながら、それでもしっかりと話を聞いていた。

第1章 8

大男は、オルソと名乗った。
カナとダンは、オルソに雇われたのである。

オルソの依頼は、魔獣が多数出現すると言われている遺跡の探索の用心棒。

何故、そんな遺跡に行かなければならないかと言うと、その遺跡にマジックアイテムが眠っているとされているからである。

オルソは、傭兵を稼業とし、戦のある国を渡り歩いている。

魔法力が付加された武器や防具を持つというのは、戦士にとって一種のステータスだ。オルソが欲しがるのも、当然の事である。

しかも、マジックアイテムというものは、金を積めば買えるという物ではない。店で売っているような代物ではないのだ。

マジックアイテムの効力は、付加された魔法力の種類によって異なるのだが、例えば、火炎魔法の魔法力が付加された剣なら、それを振るうだけで、魔術師が火炎魔法を使ったのと同じように魔法が発動される。爆発魔法の魔法力を付加されていたとすれば、爆発魔法が発動される。

魔術師は非常に数が少ない。

ごく簡単な魔法しか使えない魔術師を数えても、一国に100人はいないだろう。実戦や実生活で通用するレベルの魔法となると、10人以下だ。

そのため、魔術師は‘賢者’と呼ばれ、人々の尊敬を集めている。どの国でも、魔術師というだけで、国の重鎮として迎えられるのだ。

勿論、魔法と同等の効果を示すアイテムというのも、非常に貴重である。

しかも、アイテムに魔法力を付加する付加魔法が使える魔術師は、古代に滅亡したと言われている事から、マジックアイテムには、計り知れない価値があるのだ。

オルソは傭兵経験が長く、対人間との闘いなら、遅れをとるつもりはなかったが、魔獣との戦いには慣れていない。しかも、目的とする遺跡には、かなりの数の魔獣が生息していると言われている。

いくら腕に覚えがあるとは言え、1人挑むのは、あまりに危険だ。そのため、退治屋を相棒にしようと考えたのだ。

報酬は、先日の宿に1ヶ月宿泊した場合の宿賃。それで合意した。

第1章 9

目的の遺跡は、レプトスピラの中ほどにある山脈の中。

3人は、そこを目指して歩いてきた。

「もう1度、確認しておくが、遺跡でマジックアイテムが手に入っても入らなくても、報酬は支払ってもらうからな。」

傾斜のきつい山道を進むオルソに向かって、ダンが念を押した。

「わかってるって。お前もしつこい男だなあ、ダン。」

オルソはダンを振り返って、答えた。

「遅いぞ、ダン！」

カナも振り返り、ダンに声をかける。

先を行くオルソとカナに、ダンは少々遅れていた。

「急ぐ必要はないだろう。遺跡は逃げないからな。無駄な体力を消費する必要はない。」

「ふん、この程度の事で疲れるか！それともお前は、もう疲れたのか？」

カナはからかうような口調で、ダンに言う。

「お前と同じ調子で歩いていたら、当然、疲れるさ。俺には、お前ほどの体力はないからな。」

ダンはあっさり認めた。

オルソは、そんな2人のやり取りを不思議そうに眺めていた。

ダンに体力がないわけではない。カナがあり過ぎるのだ。ダンも、並みの戦士以上の体力はある。

この険しい山道、オルソは正直言っ、カナのペースに付いていくのは辛いのだが、そこは男の意地で、涼しい顔を装って、歩いていた。

しかし、ダンにはそのような意地はないようだ。

戦士としての実力は、明らかにダンよりカナのほうが上である。オルソはこの3日間で、それがわかった。

この3日間は野営をしていたのだが、カナとダンは起きてすぐ、早朝に実戦形式で剣の稽古をするのだ。

戦士であれば、日頃の鍛錬は当然の事、それ自体は別に不思議ではないのだが、驚くべきは、カナは目隠しをした状態で、ダンと対戦していた事である。

その状態で、カナとダンは互角なのだ。

ダンが弱いわけではない。ダンも充分に実力のある戦士だ。カナが出鱈目に強いのである。

2人の稽古を覗き見たオルソは、思わずカナに「すげえな。」と声をかけた。

稽古を見た限り、ダンならオルソでも倒せるだろうと思った。しかし、カナは無理だ。オルソは自分の腕には自信があったが、この若い女には、まるで敵わない事を知った。世の中、広いものである。

しかし、そう言われたカナは、意外な返答をした。

「ハンデなしなら、ダンのほうが強いよ。」と。

ハンデを負って戦っていたのは、カナのほうだろう。どういう意味なのか測り兼ねたが、カナはそれ以上、答えなかった。

第1章 10

さらに数時間ほど歩くと、日も暮れてきた。

「カナ。ダン。今夜はこの辺で休もうや。」

オルソはそう宣言し、腰を下ろした。うまい具合に湧水を見つけたのだ。これなら、水の心配をする事なく休める。

しかし、カナもダンも座ろうとはしなかった。

「オルソ。」

ダンが声をかける。

「なんだ？」

「もう1度、契約内容を確認したい。」

「またかよ……。いい加減にしろよ。」

「俺達は『魔獣に対する用心棒』だったよな？」

「そうだろ。」

「ならば、人間からの攻撃があつた場合、俺達はお前を守る義務はあるのか？」

「は？」

どういう意味だろうか？

と、オルソが問おうとした瞬間、カナの剣が一閃した。

地面に、複数の矢が叩き折られて落下する。

「へ！？は！？なんだ！！！？」

オルソは慌てて、自らの武器、バトルアックスを構えて立ち上がった。

木々の間に姿を隠していた男達が、次々と姿を現す。

カナとダンは、全く慌てた様子はない。

ダンも抜剣し、右手で剣を握った。

「囲まれているな、カナ。」

「27人だな。」

「ちょうどいい。それなら3で割り切れる。」

「ええつと、それじゃあ1人当たり…いくつだ？」

「9人だ。カナ、10人以上斬るなよ！」

27人の男達は、初めに放った矢が1本残らず叩き落された事で、少なからず動揺していたが、自分達が圧倒的多数である事を思い出し、「ウオオオー」という雄叫びとともに、一斉に襲い掛かってきた。

第1章 11

「野盗かな？コイツら。」

カナは男達の攻撃を軽くあしらいながら、ダンに話しかけた。

「まあ、野盗以外の何者でもないだろうな。」

ダンにも余裕がある。野盗の攻撃を剣で受け流している。

「お前ら、何、呑気にくつちゃべってんだ！」

オルソは必死でバトルアックスを振るっている。

オルソは腕に覚えのある戦士だし、カナはさらにその上を行く凄腕の戦士だ。しかし、いくらなんでも、相手の数が多過ぎる。

「オルソ、さっきの話の続きなんだが…。」

「何なんだよ！」

「俺達是对魔獣用に雇われたのであって、人間相手の戦闘は、契約範囲外だ。だが、この野盗は俺達も獲物と見なしていたようだから、全体の3分の2の18人は、こちらで引き受けよう。けれど、もしそれ以上、手を貸して欲しいなら、追加料金をいただくぞ。」

「馬鹿野郎！今、そんな話してる場合じゃ！？」

話をしている間にも、オルソは何度も野盗の槍やら剣やらで、突き刺されそうになっている。オルソのバトルアックスの大振りの攻撃は、まだ敵に一撃も与えていない。

しかし、カナは危なげない戦いぶりです。すでに7人の男を屍に変えていた。

ダンは器用に敵の攻撃を受け流しているが、まだ斬り倒した相手はいない。

「ダン！。私の分、終わった。」

カナは、9人目の野盗を斬り倒すと、なんと剣を納めてしまった。「バ、何やってんだよ！？カナ！」

「だって、ダンが10人以上、斬るなって言うからさ。」
カナは涼しい顔で、残る野盗たちの攻撃を躲している。

「オルソ。自力で9人倒せるか？」

「無理に決まってるだろ！大バカヤロー！」

「それじゃ、追加料金決定だな。」

ダンはそう言うと、少しだけ笑ったようである。

ダンは右手で剣を振るいながら、左手を軽く突き出した。

第1章12

その周りに、いくつもの小さな炎が出現し、金魚が泳ぐように、ダンの左手の周りを浮遊する。

もしもよく観察していたら、その小さな炎の数は、残る野盗の数と同じ18である事がわかっただろう。

一体、何なのだろう？

野盗もオルソも、一瞬、動きを止めてしまった。

だが、野盗の1人は恐怖にうわずった声でこう叫んだ。

「コイツ、魔術師だ!!!」

その恐怖が伝染していくかのように、野盗達の顔色は一瞬で蒼白になった。そして、逃げ出そうと後ずさった瞬間に、ダンは火炎魔法を野盗達の顔面に向けて叩き付けた。

「うああー!!!」

「ぐおおー!!!」

炎に顔面を包まれた野盗達は悲鳴をあげ、地面の上でのた打ちまわる。

しかし、魔法の火炎が消える事はなかった。

すぐに野盗達は屍と化して、動かなくなった。

結局、その場には、剣で斬り伏せられた死体が9体、顔面を消し炭に変えられた死体が18体、転がっていた。

第1章 13

ダンの左手が、スツと淡い光を放った。

それを自分の額のあたりに持つていくと、自分で出した火炎魔法で僅かに焦げた前髪が、元の通りに再生した。回復魔法である。

ダンは念のために、ちらりとカナの様子も確認したが、回復魔法の必要はなさそうだ。かすり傷ひとつない。

「ダン：あんた賢者だったのか!？」

しばらくの間、呆然と立ち尽くしていたオルソが、やっとの事で声をあげた。

‘賢者’とは、魔術師の尊称である。魔術師は一般的に‘賢者様’と呼ばれるのだ。

「俺は戦士だ。魔術師じゃない。’なんて、一言も言った覚えはないがな。」

ダンは、あっさりと答えた。

しかし、オルソが驚くのも無理はない。

なんとと言っても、魔術師はごく少数なのである。

しかも、ほとんどすべての魔術師は、誰がどう見ても魔術師だとわかる格好をしている。

古代語が縫いこまれた賢者のローブに、魔法力を集中させるための宝玉が埋め込まれた賢者の杖。

魔術師は自らを‘賢者’と称し、戦士は野蛮な人間、自分達が使役する人間と蔑んでいるから、魔術師が自ら戦士のような格好をする事など、まずあり得ない。

ましてや魔術師が剣を振るうなど、考えられないのだ。

「なんで賢者が、そんな恰好してんだよ!？」

ダンは一見、戦士のような恰好をしている。

その理由は簡単で、賢者のロープは、高価なばかりで歩きにくいからである。だから、わざわざ着ようとは思わない。

また、ダンは魔法力を集中させる賢者の杖がなくとも、自分の掌や指先、やろうと思えば爪先や額にだって、魔法力を集中させる事ができる。別に賢者の杖など必要ないのだ。

そもそもダンは、たかが魔法ができるくらいで、**賢者様**とは馬鹿らしいという考え方の持ち主だ。**賢者**と呼ばれるのは嫌いなので、自分から**魔術師**だとわかる格好は、あまりしたくない。

「珍しい魔術師だろ、コイツ。」

カナはおかしそうに、ダンを指さした。

「珍しすぎるだろ。」

オルソは呻くように言う。

第1章 14

「なんで、天下の賢者様が退治屋なんかやってんだ？賢者なら、いくらだっていい条件で仕官できるだろ？」

オルソが、もっともな疑問を口にする。

「理由などない。宮仕えは面倒だからだ。」

それは、半分は本心だ。しかし、それ以外の別の理由もある。そちらの理由は、敢えて言おうとはしなかった。

「本当に珍しい魔術師だぜ。なんで剣技なんか、知ってたんだよ？」

「カナとの付き合いは長いからな。カナの戦い方を見て、勝手に覚えた。」

見様見真似でここまで覚えてしまったとは、本職の戦士にしてみれば、頭にくる話だ。戦士と名乗る人間の過半数は、ダンの剣に敵わないだろうから。

「そうそう。こいつの剣技は完全に私の真似なんだ。だから、自分は左利きのくせに、私と同じように右手で剣を持つんだぞ。」

カナがダンの説明に付け足す。

「何！？左利き！？それじゃ、お前、利き手と反対の手で、剣を握ってんのか！？」

さらに、信じられない事実である。

「今頃、俺が左利きだと気が付いたのか？観察力のない奴だな。そんなもの、一度、一緒に食事をすれば、わかるだろう。まあ、右手で剣を持つのは、それ以外の理由もある。俺は右手でも左手でも、足にだって、魔法力を集中させる事は出来るが、やはりやりやすい場所というものがあるんだ。俺の場合、利き手の掌。だから、利き手で剣は持たない。俺の本職は魔法だからな。」

魔法のために、利き手をあけているというわけだ。

朝の鍛錬の後のカナの言葉の意味が、ようやくオルソにわかった。
『ハンデなしなら、ダンのほうが強いよ。』
魔法を使われたら、たとえカナでもダンには敵わないだろう。

「ところで、オルソ。追加料金の件だが…。」
「
ダンには、もうこの話には飽きたとばかりに、商談に移った。」

第1章15

それから、丸1日以上、何事もなく過ぎ去った。

今は野盗との戦闘の翌々日の朝である。

「しかしよう、いくら何でも高すぎねえか？」

オルソは、この1日、幾度となく繰り返した台詞を、また口にした。

「妥当な線だ。この額に不満があるなら、1人で行け。」

ダンは素っ気なく答える。

話は「追加料金」についてである。

カナとダンは、もともとオルソの魔獣への対抗手段として雇われた。

しかし、これに野盗等の対人間の戦闘の際の助力も追加された。これにより、当初の料金の2倍の額をオルソは支払う事になったのである。

かなり痛い金額だが、仕方ない。1人で魔獣の巣窟に挑むのは、無謀すぎる。それに、ダンが魔術師である事を考えると、実は安すぎると言える額だ。魔術師は、本来、生半可な金額では雇えないのだ。

それ以上に、オルソはカナとダンが気に入ってしまった。何となく、もう少し一緒に旅してみたい気分である。

第1章 16

ダンは特殊な方法で、泥水を濾過しながら、オルソと話していた。今日は飲み水になるような水場を確保できなかったのだ。雨水の溜まった大きな水たまりのようなものは見つけたが、この水はそのまま飲めるような代物ではなかった。しかし、これで飲料水は楽に確保できる。

これは魔法ではないが、このような技術は、膨大な知識を有する魔術師ならではの、とも言える。

魔法とはイマジネーションであり、魔法とは科学の結集だ。

火炎魔法であれば、酸素が発火するところを、爆発魔法であれば、水素が集結して爆発するところを、分子レベルで詳細にイメージする。

科学的知識がなくては、魔法は行使できない。魔術師とは、どんな科学者よりも科学に精通しているのである。

回復魔法の場合は、傷付いた組織が再生する様子、細胞分裂の様子、炎症が引いていく様子、ホルモンバランスが整えられていく様子を詳細にイメージする。そのためには当然、人体についての解剖学的、生理学的知識を完璧なまでに必要とする。

しかも、体のどの箇所がどのように傷付いているかを正確に把握できなければ、魔法は成功しない。

例えば、胸を強打した場合、肋骨骨折だけ気が付いて、実は外傷性気胸も起こしている事に気が付かなかった。などという場合は、当然、回復魔法をかけても、その者は助からない。

ダンの場合、大きな負傷や病気に対して回復魔法を使う時には、回復魔法の前に透視魔法と拡大視魔法を併用し、体の内部、内臓や血管、骨の様子まで、正確に確認している。

また、細胞分裂のイメージを違えれば、狂ったように分裂し続

ける細胞を作ってしまう事がある。これは所謂ガン細胞だ。回復魔法は、ちよつと間違えると組織をガン化させてしまう事もあるのだ。そのため、回復魔法は魔法の中でも特に難易度が高く、他の魔法は使えても回復魔法だけは使えないという魔術師も多い。

そんな中で、ダンが最も得意とする魔法は、回復魔法なのである。

第1章17

目的とする遺跡は、だいぶ近付いてきた。

今日の午前中には、その入口に辿り着くだろう。

ただ、遺跡の中に本当にマジックアイテムが眠っているのかという
うと、ダンはまだ期待できないと思っていた。

オルソは、ただの噂を根拠としていたらしい。レプトスピラの
酒場で、複数の冒険者や吟遊詩人から聞いたという。あの遺跡には、
古代の魔術師が魔力を付加したマジックアイテムが眠っており、そ
れには世界を制覇するほどの力が秘められていると。

だが、古い遺跡ともなれば、この手の噂はいくらでもあるし、
その噂の大部分はデマだ。

しかし、ダンにとって、それはどうでも良い事である。マジック
アイテムが手に入っても入らなくても、報酬は支払われる事にな
っているのだから。

第1章 18

「ダン、飲み水はもう作り終わったか？」

1人で剣の素振りをしていたカナが近付いてきた。愛用の大剣は、鞘に納めぬまま、肩に載せている。

「ああ。これだけ作っておけば、充分にもつだろう。」

ダンは、たっぷりと水の入った水袋を見せてやった。

「それじゃ、相手しろ。」

楽しそうに、カナが言った。

日課の剣の稽古である。

街中に泊まった時以外は、カナとダンは毎朝、実戦形式で稽古する。ただし、ダンは魔法なし、カナは目隠しと、お互いにハンデを付けて。

この状態で両者は互角なのだ。

ハンデなしで勝負した事はないが、そうなれば、魔法が使えるダンの圧勝だろう。

「わかった。」

ダンはそう答えて、立ち上がった。

稽古は勿論、鍛錬の意味で行っている。少なくとも、ダンにとってはそうだ。

ダンは剣を覚えたかった。別に戦士になりたいわけではないから、魔法以上に剣が上達する必要はなかったが、自分の身は自分で守れる程度の腕は欲しかった。魔術師の戦い方をしていると、どうしても、戦士であるカナにばかり危険を背負わせて、自分は後方に下がっているようになるからだ。それが嫌だった。

ただ、カナにとって毎朝の稽古は、鍛錬の意味もあるが、遊びの延長線上でもある。ちよつと本格的なチャンバラごっこのような感覚なのだ。

と、そこへ、いきなりオルソが割り込んできた。

「ちよつと待った！」

「なんだ？オルソ。」

ダンが少々、面倒くさそうにオルソを振り返る。

「ダン、俺と1本勝負してくれねえか？」

そう言われダンは、ちよつと驚いたように、オルソを見つめた。オルソの表情が、妙に真剣だったからである。

しばらくの間、両者は無言で視線をぶつけ合っていた。オルソは額に汗すら浮かべている。

そして、ダンはスツと笑みを浮かべて、「いいだろう」と応じた。

「えー！？それじゃ、私の相手はどうなるんだ！？」

カナが不満を漏らす。

「今日は我慢しろ。意外に真剣勝負になりそうだ。魔法抜きでこの男と真剣勝負になれば、後からお前の相手をする体力は残らないだろうからな。」

「魔法、使ってもいいんだぜ。」

オルソは挑発的にそう言った。

「何言ってるんだ、オルソ。それじゃ、勝負にならないぞ。」

と、これはカナ。

「剣だけで敵わないと判断すれば、俺は魔法を出す。俺に魔法を使わせたければ、実力でそうさせるんだな。」

ダンは剣を構え、間合いをとった。

第1章 19

ダンとオルソは、互いの武器を構え、対峙する。

ようやくカナも、オルソとダンが本気でやり合おうとしている事がわかった。

カナとダンが稽古する時は、いつも寸止めで勝負を決する。当然ながら、実際に斬りつけたりはしない。

しかし、オルソの武器バトルアックスは、その重量ゆえに、寸止めが難しいのだ。実際に当たってしまったら、命に関わる。

だからこそ、ダンのほうもいざとなれば魔法を出すと言ったのだろう。ただ、とりあえずは剣だけで対応するつもりのようにだ。

(なんでコイツら、いきなり本気で勝負するんだ???)

よく理解できないカナは、疑問符だらけになった頭で、2人を見つめていた。

オルソは、バトルアックスを大上段に構えている。

ダンは、少し斜めに崩した中段の構え。構え方はカナとほぼ変わらない。

ダンの剣技は、基本的にカナの真似だ。ただ、カナほどの腕力がない分、剣はカナの物よりやや軽い物を使っている。

カナの剣は、亡き父が若かりし日に愛用していた大剣で、バトルアックス程とまではいかないが、重量はかなりの物だ。カナは子供の頃から、この剣を軽々と使いこなしているのである。

「うおおー！」

先に仕掛けたのは、オルソだった。

右足を踏み込み、間合いを詰め、大きく振りかぶったバトルアックスを振り下ろした。

ダンはその左に跳んで躲す。しかし、その一撃はフェイントだったようだ。オルソは間髪入れずに、回し蹴りをダンの脇腹めがけて飛ばした。

それも上体をひねって躲したが、完全には躲しきれず、ダンの体勢が崩れる。

そこにオルソが、バトルアックスで横薙ぎの攻撃を仕掛ける。ダンはこれを剣で受け止めたが、ダンとオルソでは、腕力が違いすぎるし、体勢も悪かった。力で強引に押しやられ、ダンは地面に転がされた。

とどめとばかりに、オルソは再びバトルアックスを振りかぶろうとした。

が、草に足をとられ、バランスが崩れた。その隙に、転んだままの体勢から、ダンがオルソの足を払う。

今度はオルソが転ばされ、起き上がったダンは、オルソの心臓めがけ、剣を突き刺した。

しかし、その剣はオルソの皮膚を一枚突き破ったところで、ピタリと止まっていた。

勿論、わざとである。

この勝負、ダンの勝ちという結果に終わった。

第1章20

しばらく、粗い息をついて座り込んでいた2人だが、ダンがオルソに向かって左手を伸ばした。

ダンの剣の切っ先で僅かに傷付き、出血していたオルソの左胸に手をかざすと、その左手は淡い光を放ち、傷は跡も残さず綺麗に消え去った。

「すまねえ。」

オルソはそう言って、天を仰いだ。

「結局、魔法なしで負けちまったな。」

「いや、そうでもない。」

「途中で足をとられたのは、確かに俺の運がなかったがな。勝負の上では運も実力のうちだ。」

そうオルソが言うと、ダンもカナモやや呆れたような顔をした。

「オルソ、気付いてないのか？ダンは魔法を使ったんだぞ。」

「は？」

「お前が足をとられたのは偶然じゃない。ダンが魔法で地面に生えていた草を操って、お前の足に絡めたんだ。」

「へ！？」

オルソは驚いたような顔で、ダンを見つめた。

「そうだったのか！？」

「そういう事だ。」

ダンはやや憮然とした声で答えた。

「なんだ、そうだったのかよ！」

オルソは途端に機嫌よくなった。

「それにしてもオルソ、なんでわざわざこんな本気の勝負をしようと思ったんだ？」

カナが尋ねる。

「そりゃあ、決まってるんだろ。男同士でわかり合うには、飲み明かすか、本気でやり合うかのどちらかだ。ダンには酒は飲めねえって言うから、一戦やってみようって思ったのよ。」

「俺はそういう考え方はしないがな。そういうタイプの男がいる事は知っている。だから、付き合ってたんだ。」

ダンが疲れたように答えた。

「ふ〜ん。それじゃ、私とも一勝負するか？」

カナがオルソに尋ねる。

「お前とは、1度飲んだらうが。それに『男同士』って言っただろ。」

「ああ、そう言えば、私は男じゃなかったな。私を女扱いする奴は珍しいから、たまに自分でも忘れる。」

オルソはガハハと豪快に笑った。

「お前は結構、いい女だけ。自覚がないのが惜しいくらいだ。」

これはオルソの本心である。

それを聞いたダンが、少々、面白くなさそうな顔をした事にオルソは気付いて、内心おかしかったが、それに関しては何も言わなかった。

「さあ、出発するでしょうや。早くマジックアイテムを手に入れようぜ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2033z/>

魔獣物語

2011年12月29日13時50分発行